



# 罪惡の起源

あらゆる苦痛、死、災害の根源的基因

大争闘シリーズ No.1



大争闘シリーズ No. 1

# 罪悪の起源

あらゆる苦痛、死、災害の根源的基因

(キリストとサタンの大争闘 29 章)

# 目次

## Contents

罪の存在に対する疑問	1
宇宙の調和	3
罪の侵入	5
ルシファーの悪だくみ	10
ルシファーの大欺瞞	13
反逆の結果	17
天からの追放と地上での反逆	20
キリストに対するサタンの挑戦	24
贖いの計画の意味	27
罪の根絶	31

## はじめに

皆さんは生まれたときから手足が無かったオーストラリアのニック・ヴィッジのことを聞いたことがあるでしょうか？

1歳9ヵ月目に、原因不明の高熱と腹痛におそわれ、一生、目も耳も口も不自由という三重苦を負って生きたヘレンケラーのことを知らない人はいないでしょう。集団赤痢で脳性麻痺になった瞬きの詩人、水野源三のことも知っておられるでしょう。

ある場合には、一挙に大勢の人の命を奪う戦争、自然災害、事故に遭う。なぜ、こんなことがあるのでしょうか？そんな目に遭ったら、また見たら誰でも叫ぶでしょう。神様ってホントにおられるのでしょうかと。

神が愛であるなら、人はどうしてこの世で様々な悩み、苦しみに遭うのでしょうか。

この世界には、不条理と思われることがたくさんあります。なぜ病や死が人に臨むのでしょうか？人ばかりではなく、地球そのものが病んでいます。

これらの根本的な問題に答える「各時代の争闘」という本があります。この本は、地球上に見られるあらゆる不幸と悲惨の原因、罪惡の起原はサタン(悪魔)であることを聖書から解き明かし人生の謎にすっきりと解決を与える本です。著者、E.G. ホワイトは言っています。

「真理と誤謬との間の争闘の模様を解明すること、サタンの策略を明らかにし、これに抵抗して勝利する方法を示すこと、神は正義と慈愛をもって被造物を取り扱われるということが明らかになるよう、罪の起源とその最終的処置に関して光を投げかけつつ、悪という大問題に満足のゆく解決を与えること、そして神の律法が聖であって不変のものであることを明示すること—これらが本書の目的である。」

この本の後半から分冊にして、シリーズにしました。これらの小冊子をとおして、読者が真の希望と幸福を掴んでくださることを心から願うものです。

また、「キリストとサタンの大争闘」の全体を読むことは、読者に納得のいく正しい歴史観—世界観ばかりでなく宇宙観を与えることと信じます。

## 罪の存在に対する疑問

罪というものが  
どうして起こったの  
か、なぜ罪があるの  
かということ、多  
くの人々の心を悩ま  
す問題である。人々



は、悪の働きやその恐るべき結果である不幸と  
悲しみを見て、いったいなぜ限りない知恵と力  
と愛であられる神の主権の下にこうしたことが  
存在するのかと疑問を抱く。人間の説明できな  
い神秘がここにある。人々は、半信半疑である  
ために、神のみ言葉の中にはっきりとあらわさ  
れている救いに不可欠な多くの真理を悟ること  
ができないのである。なぜ罪というものがある  
のかということ調べるために、神が啓示され  
たことのない点まで追求しようとする人たちが  
いる。そのため彼らは、この困難な問題を解決  
することができない。物事を疑ったり、何ごと

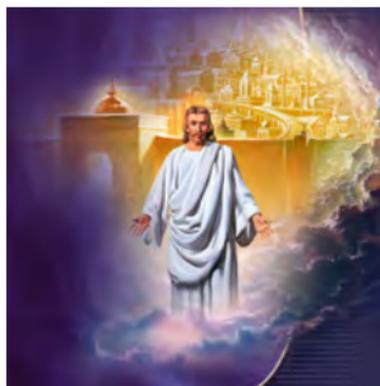
にも理屈をこねまわしたりする、つまり、あら探しをしたりするような気持ちに動かされる人は、これを口実にして聖書のみ言葉を拒否してしまうのである。中にはまた、言い伝えや誤った解釈のために、神のご品性、神の統治の性質、罪に対する神の取り扱いの原則などについての聖書の教えに暗くなり、そのために、このような悪という大問題について満足な理解を得ることができない者もある。

罪悪の起源とその存在理由について説明することは、不可能である。しかし、罪の起源についても、最後にそれが処分されることについても、悪に対する神の取り扱いの中に、神の公義とあわれみが完全にあらわされていることに関しては、十分に理解できるのである。何よりもまず、聖書の中にはっきりと示されてることは、罪が入ってきたことについて神には何の責任もないということ、神の統治上の欠陥や神の恵みが独断的に取り消されることなどが、反逆

の発生のきっかけになったのではないということである。罪は一種の侵入者である。その罪が現れたことについては理由をあげることができない。それは、まさに神秘的であり、不可解であって、その言い訳をすることは、それを弁護することになる。もし罪の原因とその存在理由とが明らかにされたとしたら、それはもはや罪ではなくなる。神のみ言葉の中に示された、罪についての唯一の定義は「罪は不法である」ということである。すなわち罪は、神の統治の基礎である愛の律法に対して戦っている原則が、外にあらわれた結果である。

## 宇宙の調和

罪が侵入する前には、全宇宙には平和と喜びがみなぎっていた。すべては創造主



のみ心と完全に調和していた。神に対する愛が最高の位置を占め、お互いの間の愛もかたよりのない公正なものであった。神の独り子で、言葉であられるキリストは、永遠の父と一つであられた。すなわち、その性質において、品性において、また目的において一つであり、この宇宙全体で、何ごとにおいても、神の計画と相談にあずかることのできるただ一人のお方であった。天の父は、キリストによって、天の全住民を創造する働きをされた。「万物は、天にあるものも地にあるものも、見えるものも見えないものも、位も主権も、支配も権威も、みな御子にあって造られたからである。これらいっさい



のものは、御子によって造られ、御子のために造られたのである」(コロサイ 1:16)。こうして全天はキリストに対して、天

父に対するのと同じ忠順をあらわした。

もともと愛の律法は神の統治の基礎であるから、すべての被造物の幸福は、この偉大な義の原則に完全に一致することにあつた。神は、すべての被造物の愛の奉仕、すなわち、神のご品性に対する賢明な理解から生じる尊敬をお望みになる。神は、強制的な忠誠を決してお喜びにならないで、誰でも神に対する奉仕が自発的にできるように、すべての者に意志の自由を与えておられる。

## 罪の侵入

しかし、この自由を悪用した者があつた。キリストに次いで最も神から栄誉を受け、天の住民の中で最高の権威と栄光を与えられていた者から罪が始まつた。ルシファーは、墮落する前は、清く汚れのない、覆うことをなすケルビムの中の第一位の者であつた。「主なる神はこう

言われる、あなたは知恵に満ち、美のきわみである完全な印である。あなたは神の園エデンにあって、もろもろの宝石が、あなたをおおっていた。……わたしはあなたを油そそがれた守護のケルブと一緒に置いた。あなたは神の聖なる山にいて、火の石の間を歩いた。あなたは造られた日から、あなたの中に悪が見いだされた日まではそのおこないが完全であった」(エゼキエル 28:12-15)。

ルシファーは、神の特別な恵みのうちにとどまって、全天使から愛と尊敬を受け、自ら高貴な能力を発揮することにより、他の者たちの祝福となり、創造主の栄光をあらわすことができたはずであった。しかし預言者は、「あなたは自分の美しさのために心高ぶり、その輝



きのために自分の知恵を汚した」と言っている（エゼキエル 28:17）。ルシファーは、次第に自分を高めたいという思いをつのらせた。「あなたは自分を神のように賢いと思っている」（同 28:6）。「あなたはさきに心のうちに言った、『わたしは天にのぼり、わたしの王座を高く神の星の上におき、北の果なる集会の山に座し、雲のいただきにのぼり、いと高き者のようになろう』（イザヤ 14:13,14）。ルシファーは、被造物の最高の愛情と忠誠心をひたすら神に向けさせようとしないで、彼らの奉仕と服従を自分に向けさせようと努力した。この天使たちの君であるルシファーは、全能の神が、み子にお与えになっていた栄誉をほしがって、キリストだけがお用いになれる大権である権力にあこがれた。

全天は、創造主の栄光を反映し、神を讃美することを喜びとしていた。そして神がこのようにあがめられている間は、すべてが平和であ

り喜びであった。しかし今、全天に不協和音が漂い、調和が損なわれた。創造主のみ心に反して、自分自身を高め、自分に仕えるという思いが、神の栄光を第一としていた者たちの心に、悪の思いの兆しを感じさせた。天の会議は、ルシファーに嘆願した。神のみ子は彼に対し、創造主が偉大であられ、慈悲深く、公義の神であられること、そして神の律法は神聖にして不変の性質のものであることを示された。もともと神ご自身が天の秩序をお定めになったのであるから、ルシファーがそれを無視することは、創造主のみ名を汚し、自分自身を破滅させることになるのであった。しかし、無限の愛とあわれみをもって与えられた警告は、反抗の精神を引き起こしただけであった。ルシファーは、キリストに対する嫉妬の念にかられ、ますます強固な決意を抱いて



しまった。

自分自身の栄光に対する誇りは、主権を求める欲望を助長した。ルシファーは自分に与えられた高い栄誉を神の賜物として認めず、創造主に対して何の感謝の念も起こさなかった。彼は自分の聡明さと自分が置かれた高い地位を誇るあまり、神と同等になることを熱望した。彼は天の住民から尊敬され、愛されていた。天使たちは彼の命令を実行することを喜び、彼はすべての天使たちにまさる知恵と栄光を与えられていた。しかし神のみ子は、天の君主であられ、父なる神と同等の権力と権威を持っておられる方として認められていた。キリストは、神の会議には常に参加しておられたが、ルシファーはそれに携わることが許されていなかった。「なぜキリストが主権を持っておられるのか。なぜキリストがこのようにルシファーよりもあがめられるのか」と、この強力な天使は疑った。

## ルシファアの悪だくみ

ルシファアは、神のみ座の隣にある自らの座を立て、天使たちの間に不満の精神を広めるために出て行った。彼は巧妙に秘策を練って、一時はいかにも神を尊敬するかのよう装って、自分の真意をかくし、天の住民たちを支配する律法には不必要な束縛が加えられているとほのめかし、律法に対する不満の念を引き起こそうと努めた。彼は天使たちに、あなた方の性質は聖く純潔なのだから、自分自身の意志の命令に従うべきであると説き、また、神がキリストに最高の栄誉を与えられたことは、自分に対する不公平な待遇であると言って、天使たちの同情を求めた。彼は、自分がもっと大きな権力と栄誉とを求めるのは、決して自らを高めるためではなく、むしろ天のすべての住民のために自由を確保するためであって、こうすることによって彼らはもっと高い身分になれるのだと主張した。

神は、大いなるあわれみをもって、長い間ルシファーに対して忍耐された。彼は、最初不満の念にから



れたときはもちろん、忠誠な天使たちの前で虚偽の主張をしたときでさえ、その高い地位からすぐに追い出されることはなかった。彼は長い間天上のその地位に留められていて、何度も何度も彼には、悔い改めと服従の条件のもとに許しが提供された。彼に間違いを自覚させるために、無限の愛と知恵であられる神だけが考え出すことがおできになるような、あらゆる努力が払われた。不満の精神というものは、それまで天で見られたことがなかった。ルシファー自身も、最初は、自分がどちらへ押し流されているのか分からず、自分の感情の本当の姿が分かっていなかった。しかしルシファーは、自分の不

満が理由のないものであることが分かると、彼は、自分が誤っていたこと、神の主張が正当であること、また事実を全天の前に明らかにすべきであることを自覚した。もし彼がそのような態度に出ていたなら、彼自身も、また多くの天使たちも救われていたことだろう。この時、彼はまだ、神に対する忠誠を完全に放棄していたわけではなかった。守護のケルブとしての地位を捨てたけれども、創造主の知恵を認めて自ら進んで神のみもとに帰り、神の大いなるご計画のうちに定められた地位に満足して、忠実に務めるのであれば、彼は元の地位に復帰できたに違いなかった。しかし彼の傲慢心は、服従することを拒んだ。彼はあくまでも自らの行動を弁護し、悔い改めの必要はないと言い張り、創造主に対する大争闘に完全に身を投じてしまった。

## ルシファールの大欺瞞

今や彼は、部下の天使たちの同情を得るために、その偉大な知力の全能力を集中して欺瞞の業に打ち込んだ。キリスト



が彼に対して警告と勧告をお与えになったことさえ曲解して、彼の反逆的な計画に利用した。彼は自分のことを深く信頼し敬愛している者たちに向かって、自分は神から不公平な待遇を受け、自分の地位は尊敬してもらえず、その自由は奪われようとしていると語った。彼はキリストの言葉を曲げて伝えただけでなく、キリストは天の住民の前で彼に侮辱を与えようとしていると言って、ごまかしと露骨な偽りでもって神のみ子を非難した。彼はまた、自分と忠実な天使たちとの間に、ありもしない問題を引き起こそうと努めた。彼は、自分に味方しない者たち

に向かって、天の住民の利益に対して冷淡であると言って非難した。彼は自分自身がしている行為を、神に忠誠を保っている者たちのせいにした。また彼は、神の自分に対する不公正を攻撃するために、創造主のみ言葉と行為を誤って伝えるという手を用いた。神の御目的について、ずる賢く巧妙な議論をすることによって天使たちの心を惑わすよう、彼は企てた。そこで彼は、ごく単純なことの一つ一つに謎めいたベールをかけ、巧みに解釈を曲げて、天使たちが神の明白なみ言葉に対して疑いを投げかけるように仕向けた。彼は神の統治と密接に関連した高い地位を占めていたので、彼の言うことにはいっそう大きな力が加わり、多くの者が引きずられて彼に加担し、神の権威に反逆した。

賢明な神は、このような不満の精神が積極的な反乱に発展するまで、サタンがその行為を押し進めていくことを黙認されていた。すべての者が、彼の計画の真相と傾向とを知るようにな

るためには、彼の計画を十分に発展させる必要があった。ルシファーは油注がれたケルブとして非常な榮譽に輝いていて、天使たちから非常に崇められ、愛されていたので、彼らの上に絶大な影響力を持っていた。神の統治には天の住民だけでなく、神がお造りになったすべての世界が含まれていたため、サタンは、天使たちを反逆に加わらせることができるならば、他世界も巻き込むことができると考えた。サタンは自分の目的を達成するために、可能な限りのもっともらしい議論と偽りを用いて、巧妙に自分の疑問点や不満を持ちだした。彼の他を欺く能力は大したものであり、また偽りの仮面で変装することによって、彼は有利な立場を得ていた。このため忠誠な天使たちでさえ彼の本性を十分に見分けたり、彼の行為がどこに向けられているかを見いだしたりすることができなかった。

サタンはもともと非常な榮譽を受けていたのであり、またその行為の一切が神秘に包まれ

ていたので、天使たちでさえ、彼の行為の真相をあばくことは困難であった。罪は、完全に姿を現すまでは、それがどんなに邪悪なものであるかが分からない。それまで全宇宙には罪というものが全くなかったので、天の住民は罪の性質と邪悪さについて何の概念も持っていなかった。また彼らは、神の律法を無視することから生じる恐るべき結果を、感じ取ることができなかった。その上サタンは、最初のころは神に対する忠誠をもっともらしく告白し、自分の行為を隠していた。彼は、神のみ栄え、神の統治の安定、天の全住民の幸福を望んでいるかのように主張していた。彼は部下の天使たちの心に不満を吹き込みながら、一方では、まるで不満を取り除こうと努力しているかのように見せかけていた。彼が神の統治の律法と秩序の変更を強調したときも、天の調和と一致を保つためには、そうすることが是非とも必要であるというふうに見せかけた。

## 反逆の結果

罪を取り扱われるに当たって、神がお用いになるのはただ義と真理だけであったが、サタンは神がお用いになることができないもの、すなわち、こびへつらい、欺きなどを用いた。彼は神のみ言葉を偽り、神の統治の計画を天使たちの前に間違っただけで伝え、神が天の住民のために律法と規則を定められたのは正しくない、また神が被造物から服従と従順を要求されるのは、ただ神がご自身を高めるためであると主張した。そこで、天の住民はもちろん、すべての世界の住民の前で、神の統治が正しく、神の律法が完全であることが実証されなければならなかった。サタンは、自分こそ宇宙の幸福を増進しようとしているのだと見せかけていたので、この横領者の本性と彼の真の目的を、すべての者に分からせねばならなかった。彼がその邪悪な業によって自らの本性を暴露するまで、時間を与えねばならなかった。

サタンは、彼自身が天で引き起こした不和を、神の律法と統治のせいにした。すべての罪悪は、神の政治の結果であると彼は断言した。彼は、神の法令を改正するのが自分の目的であると主張した。そこで彼に、自分の主張の内容を証明させ、彼がもくろんでいる神の律法の変更の結果がどのようなになるかを示させる必要が生じた。彼自身の行為が、自らを罪に定めるのでなければならなかった。サタンは初めから、自分は反逆しているのではないと主張していたので、全宇宙は、この欺瞞者の仮面がはがれるのを見なければならぬのであった。

サタンをこれ以上天にとどめておくべきではないと決定されたときでさえ、無限の知恵にいます神は、サタンをただちに滅ぼすということとはなさらなかった。ただ愛の奉仕だけが神に受け入れられるのであるから、神に対する被造物の忠誠は、神の公義と慈愛とに対する確信に基づかねばならない。天と他世界の住民たちは、

まだ罪の本性とその結果を理解する用意ができていなかったのも、サタンを滅ぼしてしまったのなら、神の正義とあわれみとを認めることができなかつたであろう。だからもし、サタンがその場で滅ぼされていたのなら、彼らは、愛よりもむしろ恐怖から神に仕えたに違いない、そして、サタンの感化の力がそのまま保たれ、反逆の精神を根絶することはできなかつたであろう。したがって、罪悪が十分に成熟するまで放置しておく必要があつた。永遠にわたる全宇宙の幸福のためには、サタンに彼の主張を思う存分発表させて、すべての被造物に、神の統治に対する彼の中傷、非難の真相が何であるかを知らせると共に、神の公義とあわれみ、また神の律法の不変性を、永遠に疑問の余地のないものとする必要があつた。

サタンの反逆は、来たるべきすべての時代にわたって、全宇宙にとって一つの教訓、すなわち罪の本性とその恐ろしい結果についての永久

的な証となるのであった。サタンの支配がもたらすもの、人と天使たちに及ぼすその影響は、神の権威を無視することがどんな結果になるかを示すのであった。それはまた、神のお造りになったすべての被造物の幸福は、神の統治及びその律法の存在と切っても切れない関係にあるということを証明するのであった。このようにして、この恐るべき反逆の実験の歴史は、全宇宙の聖なる住民たちにとっての永久的な保障となり、彼らを恐るべき反逆から守り、犯罪とその刑罰の苦しみから救うものとなるのであった。

## 天からの追放と地上での反逆

天における争闘が終わるその間際まで、この横領者サタンは、自分が正しいと主張し続けた。この反逆の指導者であるサタンは、すべての共鳴者たちと共に幸福な住み家から追放されなけ

ればならない  
ことが布告さ  
れたとき、大  
胆にも創造主  
の律法に対す  
る軽蔑を口に  
出した。彼は、



天使たちは支配される必要はなく、自分自身の意志に従うべきで、この意志こそ、いつでも彼らを正しく導くものであるという主張を繰り返した。彼は、神の律法は彼らの自由を束縛するものであると言って批判し、このような律法を廃止し、天使たちをその束縛から解放し、もっと高貴なもっとすばらしい身分にさせるのが自分の目的であると宣言した。

サタンとその軍勢は、口をそろえて、自分たちの反逆のとがをすべてキリストのせいにし、もし自分たちが譴責されなかったら反逆はしなかったのだと力説した。このようにして反逆

の頭サタンとその共鳴者たちは、神の統治を倒す機会をうかがいながら、しかも、自分たちは圧政的な権力の、罪のない犠牲者であると言い張って、かたくなに、大胆に不服従の態度を続けたため、ついに天から追放された。

しかし、天において反逆を引き起こしたその同じ精神が、今もなお地上で反逆を押し進めている。サタンは以前、天使たちに対して用いたのと同じ政策を、人類に対して用いている。彼の精神は不従順な人々の間に広まり、協力して神の律法による拘束を打破しようと努めるかわら、律法を破ることによって人類は自由になるのだと叫んでいる。罪に対する譴責は、依然として憎悪と抵抗の精神を呼び起こす。神の警告の言葉が良心に訴えられると、サタンは、人々に自分は正しいのだと思わせ、彼の罪の行為に他人の共鳴を求めさせる。彼らは自分の誤りを正さないで、かえって譴責者が問題の唯一の原因であるかのように、その譴責者に対して憤慨

する。これが義人アベルの時代から今日に至るまで、罪を責める者に対して罪人が示してきた精神である。

サタンは、天において行ったように、神のご品性を間違って伝えることによって、神を苛酷で圧政的なお方であると思わせ、人類を罪に誘った。そしてそれが成功すると、サタンは、神の不当な束縛が、彼自身の反逆を引き起こしたように、人類を墮落に導いたのだと宣言した。

しかし永遠であられる神は、ご自分の品性について自ら宣言しておられる。「主、主、あわれみあり、恵みあり、怒ることおそく、いつくしみと、まこととの豊かなる神、いつくしみを千代までも施し、悪と、とがと、罪とをゆるす者、しかし、罰すべき者をば決してゆるさず」(出エジプト 34:6,7)。

神はサタンを天から追放することによって、ご自分の公義を宣言し、み座の尊厳と栄光を保たれた。しかし、人類がこの背信的な精神

の欺瞞に負けて罪を犯したとき、神は墮落した人類のためにご自分の独り子を死なせることに



よって、神の愛の証拠をお与えになった。この贖罪のうちに、神のご品性があらわされている。十字架という力強い証拠は、ルシファーが選んだ罪の道は決して神の統治の責任ではないことを、全宇宙に証明している。

## キリストに対するサタンの挑戦

救い主の地上でのご生涯の間、キリスト対サタンの戦いにおいて、大欺瞞者サタンの品性が暴露された。世の救い主に対するサタンの残酷な戦いほど、サタンに対する天使たちと忠実

な全宇宙の住民との同情を失わせるのに効果のあったものはなかった。キリストに対して屈服を要求したあの大胆な冒瀆、キリストを山の頂きと宮の頂上に連れ出した彼の僭越な大胆さ、目がくらむような高い所から身を投げるよう勧めたことの裏に含まれた悪意に満ちた計画、根の深い敵意でもってあちらからこちらへと救い主を追い回したこと、祭司や民たちの心をあおり立ててキリストの愛を拒否させ、ついには彼らに「十字架につけよ、彼を十字架につけよ」と叫ばせたことなど—こうしたすべてのことが全宇宙を驚かせ、憤慨させた。

世の人々をしてキリストを拒むようにさせたのは、サタンであった。悪の君はイエスを滅ぼすために、彼の最大限のあらゆる力と悪知恵を働かせた。というのは彼は、救い主イエスのあわれみと愛、同情と優しさが、父なる神のご品性を世の人々にあらわしているのを見たからであった。サタンは神のみ子が口にされる主張

の一つ一つに論争を挑み、人間を手先に使って、救い主の生涯を苦しみと悲しみで満たした。イエスの働きを妨げようとして彼が用いた詭弁と虚偽、不従順の子らによってあらわされた憎悪、歴史上比類のない善良な一生を送られた神のみ子に対するサタンの残忍な非難、こうしたことはすべて根深い報復の念から出たものであった。これまで閉じ込められていた嫉妬、恨み、憎悪、復讐の炎は、神のみ子に対してカルバリーで爆発し、一方全天は恐怖のあまり息をころしてこの光景を見つめた。

大いなる犠牲が完結されたとき、キリストは昇天されたが、歡喜して出迎える天使たちの賛美をまず制して、キリストが最初に口を開かれたのはこの言葉であった。「父よ、あなたがわたしに賜った人々が、わたしのいる所に一緒にいるようにして下さい」(ヨハネ 17:24)。その時、この懇願に対し、天の父のみ座から、言い表しようのない愛と力とをもって「神の御使

「私たちはことごとく、彼を拝すべきである」との答えが与えられた（ヘブル 1:6）。イエスには少しの汚れもなかった。イエスの屈辱は終わり、その犠牲は完結し、すべての名にまさる名がイエスに与えられた。

今やサタンの不義は言い訳の余地がなくなった。彼は、偽り者、人殺しとしての彼の本性を暴露してしまった。もしサタンが天の住民を支配することを許されたら、彼は自分の権力の下にあった人間を支配したのと同じ精神を天の住民たちにも表示したであろうということが、明らかになった。常々、彼は神の律法を破ることによって自由と高い身分が得られると主張していたが、その結果は束縛と墮落であることが明らかになった。

## 贖いの計画の意味

神のご品性とその統治に対するサタンの偽

りの攻撃は、その真相をさらけ出した。彼は、神が被造物に服従を要求されるのは、ただ神ご自身を高めるためにすぎないと非難し、創造主は他の者にだけ自己犠牲を強制しながらご自分は何の犠牲も克己もしておられないと主張してきた。しかし、今や墮落した罪深い人類の救いのために、宇宙の支配者であられる神が、その愛によってのみなし得られる最大の犠牲をお払いになったことが明らかになった。なぜなら、「神はキリストにおいて世をご自分に和解させられたからである（Ⅱコリント 5:19）。また、ルシファーは栄誉と主権という野望を抱いたために罪の門戸を開いたが、一方キリストは罪を滅ぼすために身をいやしくして死に至るまで忠実な生涯をお送りになられたことが明らかになった。

神は反逆の原則に嫌悪を示しておられた。全天は、サタンが罪に定められたことにも、人類が贖われたことにも、神の義があらわされたの

を見た。ルシファーは、神の律法が不変のものであり、その刑罰は免れることができないものであるならば、これを犯す者はみな永久に創造主の恩恵から除外されなければならないと言明していた。つまり、彼は、罪に染まってしまった人類は贖いの対象からはずされ、結局、サタンの当然の餌食であると言っていた。ところがキリストの死は、人類のための覆すことのできない証拠となった。律法を犯した結果として受けなければ



ならない刑罰は、神と等しいお方であられるキリストの上に置かれた。それゆえに、人は自由にキリストの義を受け入れることができ、神のみ子が謙遜と悔い改めの生活を送ることによって勝利されたように、サタンの力に対して勝利することができるのであった。このように、神

は義そのものであられるが、イエスを信じる者をも義とされるのであった。

しかし、キリストが地上にくだって苦難と死を受けられたのは、ただ人類の贖いを成し遂げるためだけではなかった。キリストは「律法を大いなるものとし」（欽定訳）これを「光栄あるものとする」ために来られたのである。この世界の住民が律法を正しく認識するようにするだけでなく、神の律法が不変なものであることを、宇宙の全世界に証明するためであった。律法の要求が廃止できるものであったなら、神のみ子は罪を贖うためにご自分の生命をささげられる必要はなかったのである。キリストの死は、律法が不変であることを証明している。罪人を救うために、父とみ子が無限の愛に迫られて払われた犠牲—贖いの方法としては、この計画以外他になかった—は、公義とあわれみが神の律法と統治の基礎であることを全宇宙の前に証明している。

## 罪の根絶

審判が最終的に執行されるとき、罪の理由は何一つ存在しないことが明らかになる。全地の審判者であられるキリスト



が、サタンに向かって「あなたはなぜわたしにそむき、わたしの国の民を奪ったのか」と聞きただされるとき、悪の創始者であるサタンは何の言い訳もできない。反逆者の全軍は言葉を失い、口を閉じるより他はないのである。

カルバリーの十字架は、律法が不変であることを鮮明にすると共に、罪の価は死であることを全宇宙に宣言している。「すべてが終わった」との救い主の臨終の叫びは、サタンに対する吊いの鐘となった。長い間継続されてきた大争闘はここに決定し、悪の最終的な根絶が確実

となった。神のみ子は「死の力を持つ者、すなわち悪魔を、ご自分の死によって滅ぼすため、自ら墓の門をくぐられた（ヘブル 2:14）。ルシファーは自分が高い地位にのぼりたいとの望みから、「わたしは天にのぼり、わたしの王座を高く神の星の上におき、……いと高き者のようになろう」と言ったのであったが、神はこう宣言しておられる。「わたしは……あなたを地の上の灰とした。……あなたは……永遠にうせはてる。」「万軍の主は言われる、見よ、炉のように燃える日が来る。その時すべて高ぶる者と、悪を行う者とは、わらのようになる。その来る日は、彼らを焼き尽して、根も枝も残さない」（イザヤ 14:13,14、エゼキエル 28:18,19、マラキ 4:1）。

来たるべき日を迎えるとき、全宇宙は、罪の性質とその結果について証を立てる者となるであろう。罪を徹底的に根絶することは、世の初めだったら天使を恐れさせ、神の栄えを汚した

であろうが、今では、神のみ心を行うことを喜び、心のうちに神のおきてを持っている宇宙の全住民の前に、神の愛を立証し、そのみ栄えを確立するものとなる。もはや悪は再び現れてこない。「患難かさねて起こらじ」と聖書には言われてる（ナホム 1:9 文語訳）。サタンが束縛のくびきであると非難してきた神の律法は、自由の律法として尊ばれる。試練を乗り越えてきた被造物は、はかりしれない愛と限りない知恵のお方としてそのご品性が自分たちの前に十分にあらわされた神に対し、忠誠をひるがえすようなことは、もはや二度とないのである。



もっと詳しく知りたい方のために、  
大争闘小冊子シリーズの完全版

## “キリストとサタンの大争闘”



E. G. ホワイト著

ポケット版 400円

各時代の人類歴史に展開されてきた善と悪、真理と誤謬の大争闘の真相と悪の勢力の陰謀と策略を明らかにし、それに勝利する方法、今起こっている諸事件と諸現象はどんな意味を持っているか、人類にどんなすばらしい未来が待っているか等々が解明されている必読の書！

お問い合わせ、お申込みは下記の連絡先まで

サンライズ ミニストリー

〒905-0428 沖縄県国頭郡今帰仁村字今泊1471

TEL(0980)56-2783 FAX(0980)56-2881

contact@srministry.com

www.srministry.com

# 大争闘小冊子シリーズ

- No.1 罪惡の起源
- No.2 サタンと人類の戦い
- No.3 悪魔のわな
- No.4 人は死んだらどうなるか？
- No.5 心霊術の正体
- No.6 現代キリスト教会の危機
- No.7 ローマ法王教の狙い
- No.8 差し迫った戦い
- No.9 ただ一つの防壁一聖書
- No.10 世界への最後の警告
- No.11 大いなる悩みの時
- No.12 神の民の救出
- No.13 平和な千年期は来るか？
- No.14 大争闘の終結



サンライズ ミニストリー

〒905-0428 沖縄県国頭郡今帰仁村字今泊1471

TEL(0980)56-2783 FAX(0980)56-2881

contact@srministry.com www.srministry.com